

中国における日本文学教育の現状と課題

——大学日本語専攻を中心に——

周 硯 舒*

The Current Status and Challenges of Japanese Literature Education in China : Focusing on University Japanese Language Majors

ZHOU Yanshu

The history of Japanese language education in Chinese universities dates back to 1928 when it was formally initiated at Peking University. Subsequently, Japanese language majors were established at institutions such as the University of International Business and Economics, Shanghai International Studies University, and Beijing Foreign Studies University, leading to a gradual proliferation of Japanese language education. Following China's accession to the WTO in 2001 and the subsequent opening of its market, the demand for Japanese-speaking talent surged due to increased foreign investment. Consequently, the number of universities offering Japanese language majors expanded, reaching 507 by 2023. Japanese literature education plays a crucial role in the history of Japanese language education at Chinese universities. This paper investigates the curriculum of Japanese language majors and the prominence of Japanese literature within it, focusing on two key subjects: literary history and literary works selection and analysis. Through analysis, this study aims to explore the structure, reality, and challenges of Japanese literature education in Chinese universities. Recent challenges such as saturation in the Japanese-speaking talent market and a shortage of instructors have impacted Japanese literature education. While Japanese literature courses are widely offered, issues like inadequate teaching staff, outdated teaching materials, and lack of student interest persist. Overcoming these challenges requires enhancing teacher training, improving teaching materials, and introducing diverse teaching methods such as active learning and project-based learning. Additionally, efforts to incorporate the latest research findings and literary interpretation trends are needed to stimulate student engagement and interest in learning.

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Researcher, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

キーワード：中国大学，日本文学教育，文学史，作品選読，実態，問題

Key Words：Chinese universities, Japanese literature education, literary history, literary works selection and analysis, reality, challenges

はじめに

周知の通り，中国における日本語教育は，「1559年の華夷訳語の日本訳館にまで遡ることができ，中華人民共和国成立前には清末と日本の中国侵略時代と，2度にわたり、『日本語ブーム』を経験したことがある」¹⁾。中国大学における正式な日本語教育は1928年に北京大学で始まったと言われている。中華人民共和国成立後，對外経済貿易大学（1954年），上海外国語大学（1959年），北京外国語大学（1962年），吉林大学（1963年），北京第二外国語大学（1964年），黒竜江大学（1964年），大連外国語学院（1964年）などの大学で相次いで日本語専攻が設置され，中国の大学における日本語教育は徐々に進んでいる。

1970年代に入ると，ほかの地域の大学も日本語専攻を開設し始め，大規模な大学日本語教育がこの時期に開始された。2011年，中国には1,090の本科大学があり，そのうち419校が日本語専攻を設置しており，おおよそ半数の大学が日本語専攻を持っている。日本語専攻の急増は，中国が2001年にWTOに加盟し，市場が開放され，外資が導入されたことが背景にある。多くの外資企業が中国に進出したことにより，日本企業は日本語の人材需要が急増した。また，1999年以降，大学の入学者数が募集増加の政策により急速に拡大した。2015年末までに，日本語専攻のある大学は503校に達し，外国語専攻の中で英語専攻の922校に次ぐこととなり，学科の規模で全国第12位にランクされている。これ以後，日本語人材市場の需要が飽和しているため，一部の学校では募集入学者数を減らしたり，1年置きの入学者募集に切り替えたり，さらには日本語専攻を廃止する動きが見られるようになっているが，大体この規模を維持している。

2023年の一般高等学校入試全国統一考査では，日本語専攻を設置している大学は507校も数えられる。そして，2021年に公表された日本国際交流基金の調査データによると，中国の日本語学習者は105万7,318人に達し，世界で最も多いことが明らかになった。その中，高等教育機関における日本語学習者数は55万7,153人になり，日本語学習総者数の52.7%を占めているそうである。これらの調査データに基づくと，日本語は外国語専攻の中で，もはや「小さな言語」ではなく，「大きな言語」となっていると看做しても過言ではない。中国における日本語教育の規模はこれでピークを迎えたと言えるだろう。

日本文学は，中国の大学の日本語専攻の伝統的な科目であり，ほとんどの大学の日本語

専攻で日本文学の授業が開設されている。中国の大学の日本語教育の歴史において、日本文学教育がどのような変遷を経て、どのような問題が存在しているかは本研究の問題意識である。筆者はまず、985大学、211大学、師範大学、工科大学など各種大学から合わせて10校を選び、これらの大学の日本語専攻のカリキュラム設定、及び日本文学のカリキュラムにおける比重と地位について調査を行った。調査に基づき、中国の大学における日本文学教育の構造、実態と問題点をまとめてみた。それから、筆者は日本文学教育の2つの代表科目である「日本文学史」と「日本文学作品選読」の今までの出版されている教材を整理した上で、「中国における日本文学史教材一覧表」（付表1）、「中国語に翻訳された日本文学史教材一覧表」（付表2）、及び「中国における日本文学作品選読教材一覧表」（付表3）を作成した。一覧表をデータベースにして、教材の編纂形式、特徴、使用状況、及び存在する問題について分析を行った。これらの調査、分析に基づき、中国の大学における日本文学教育の問題点を探究しようとするのを本論の目的としている。

1. 中国の大学における日本文学教育の実態と問題

日本語専攻が開設されて以来、日本文学は学部生の上級レベルでの主要なカリキュラムで、日本語教育の重要な一環とされている。一般的に「日本文学史」と「日本文学作品選読」の2つの科目を指し、3年と4生に開講し、それぞれ2単位である。前者はまた「日本古典文学史」と「日本近現代文学史」に分かれ、後者は「日本古典文学作品選読」と「日本近現代文学作品選読」に分かれる。

収集したデータによると、日本文学のカリキュラム設定は、地域ごと、大学ごとに異なっていることがわかった。同じ伝統的な文科と理工科ともに開設している総合大学でも日文学コースへの取り組みやアプローチも異なっている。1学期しか開講していない大学もあれば、3、4年4学期にわたって日文学授業を開設している大学もある。一部の大学は古典から近代までの文学史をカバーしているが、古代または近代のみを教えている大学は少なくはない。まず「文学史」あるいは「文学概論」を教え、学生に一定の文学史知識を身につけさせ、日本文学の概観を把握してもらってから、また「作品選読」を開講するのが普通であるが、2つの授業を同時に開講する、あるいは最初に「作品選読」を開講し、後に「文学史」を開講する場合もある。もちろん、主にビジネス日本語人材またはIT日本語人材を育成する大学が、関連する専門授業により多くの授業時間を割く必要があるため、「文学史」しか開講していない大学もある。ただし、日本文学史の知識は多岐にわたり、複雑で、すべての内容を限られている時間内（2単位なら32時間、4単位なら64時間）に終わることができる大学はほとんどないのも事実である。

日本文学史を担当する講師は基本的には中国人教師であり、多くの場合、中国語と日本語の両方を使用して授業を行う。一部の大学では、日本人教師がこの授業を担当し、すべての内容が日本語で行われる。学生のフィードバックからは、この授業が理解しにくく興味を持たないと感じている学生が多いのに対して、一部分の学生はこの授業を学ぶべきだと考えている。特に日本語専攻の8級試験に文学に関する試験問題の割合が増加しており、学生は文学史の知識を学ぶ必要があると感じている。そして、大学院に進学したい学生は一定の日本文学知識を身につける必要もある。

日本文学は、卒業必修科目とされているため、大学でさまざまな方法で教えられるべきだが、すべての大学の日本語専攻では文学コースを設置されているとはいえない。特に近年、単位数削減の取り組みによる大学の教育改革により、日本語専攻はゼロから始める学生を対象とした教育で時間の配分がますます困難になり、既存のカリキュラムを削減する必要があると考えられている。その中で一番最初に影響を受けたのが日本文学である。日本文学コースをどのように保持するかは、一部の大学が教育計画とカリキュラムを調整する際に避けることのできない問題となっている。また、経済や社会の発展に伴い、ビジネス、IT業界に関する日本語ができる日本語専攻の人材採用需要をますます高め、このような社会的ニーズに応えるため、各大学は日本語教育のモデルを変える試みを始めた。多くの大学が、ビジネス日本語、観光日本語、科学技術及びIT関連日本語などの科目に多くの単位数を割り当て、文学の授業が一時的に軽視されるようになった。加えて、文学の授業を担当できる教員が不足しており、内容が比較的難しく、学生の関心も低いのは、一部の学校が文学の授業を開設しないもう1つの理由となっている。

幸いなことに、2000年、中国教育部高等学校外国語專業教学指導委員会日本語教育専門分会は『大学日本語専攻高学年段階教育大綱』（シラバス）を發布し、日本文学を日本語言文学専攻の主要な科目として規定しており、「日本文学史」と「日本文学作品選読」を主な授業形態とする日本文学の教育目標について詳細に説明した。具体的には、「文学の授業を通じて、学生の文学鑑賞能力や美的感覚を向上させるだけでなく、学生の視野を広げ、感性を磨き、優れた品性と人格を育成することも重要である。さらに、学生が文芸評論の方法を初歩的に習得し、将来、日本文学の研究や教育、あるいは文学に関する学術論文の執筆に備えるための基礎を築くことも必要である」。文学のカリキュラムが21世紀の高度な日本語人材育成計画において不可欠な役割を果たすことを明らかにしている。そのため、多くの大学は日本文学の授業を規模縮小させつつも基本的には維持している。

2018年1月、中国教育部は中国教育史上初の四年制大学各専攻に関する国家スタンダード『普通高等学校本科專業類教学質量国家標準』を發布し、外国語専攻が「良好な総合的な素質、確かな外国語の基礎スキル、専門知識と能力を持つ」ことを目指すべきと明確に

規定した。「関連する専門知識を習得し、対外交流、国内外の経済社会の発展、外国語教育、学術研究に必要な各外国語専門家や複合型外国語人材に適応する」ことも目指している。さらに、2020年4月、日本語専攻の専門的な位置付け、人材育成の基準を明確化し、各学校の専門的な特色や優位性を明確にし、中国特有の日本語本科専門人材育成体系を構築するため、教育部外国語言文学類教育指導委員会日本語分科委員会は『普通高等学校本科外国語言文学类专业教学指南』（以下、『指南』と称する）を発行した。『指南』は日本語専攻の学生に対して「日本語の使用」「文学鑑賞」「異文化間コミュニケーション」などの能力要求を提示し、日本語専攻の学生が「正しい世界観、人生観、価値観」「良好な道徳品質」「社会的責任感」を持つべきであると述べており、さらに「中国の情熱」と「国際的な視野」を持つことが求められている。『指南』は、高度な日本語人材育成に新たな要求を提起し、中国の大学における日本語教育が新たな段階に入ることを示唆している。

「文学鑑賞能力」については、『指南』は詳細に説明し、学生には「日本文学作品の主要内容を理解し、テーマの思想を把握する能力が求められる。また、作者の創作スタイル、技法、言語芸術を理解し、文学作品について批評する能力も求められる」。『指南』が提示する日本文学の授業には、必修科目「日本文学概論」のほかに、言語文学方向の選択科目として、「日本文学史」「日本古典文学作品選読」「日本近現代文学作品選読」「中日比較文学」「日本文学専門テーマディスカッション」「日本映画・アニメ文学」「日本作家と流派研究」「文学理論と批評」なども挙げられている。これらの授業はそれぞれ2単位で、3年と4年に開講される。

『指南』の発行後、一部の学校は新しい『指南』の要求に従ってカリキュラムを修正し、「日本文学史」の名称を「日本文学概論」に変更したが、一部の学校は以前の名称である「日本文学史」を維持している。一見、2つの名称にはあまり違いはないが、実は日本文学に関する2つの異なる授業であり、それぞれに特徴がある。「日本文学史」は、日本文学の歴史的な発展や流れを学ぶ授業で、普通、古代から現代までのさまざまな文学作品や作家を学び、日本文学の変遷や形態を把握する。この授業では、古典文学や近代文学、さらには昭和や平成時代の文学など、時代ごとの文学作品や背景について詳しく学ぶ。学生は日本文学の歴史的な経緯や文学の特徴を理解し、日本文学の基礎知識を獲得することが一般的である。

一方、「日本文学概論」は、より広範な視野で日本文学全体を捉える授業で、この授業では、日本文学の全体像や特徴、ジャンル、作家などについて、総合的かつ概的に学ぶ。文学の基本的理論や概念、文学の分析方法なども学ぶ。また、ほかの文化や文学との比較や関連も取り上げられることがある。この授業では、日本文学全体の理解を深めるとともに、学生が個々の作品や作家を把握する基盤を築くことが大事である。

この2つの授業の異なる点としては、「日本文学史」は時間的な流れを重視し、時代ごとの文学の変遷や背景を詳細に掘り下げるが、「日本文学概論」はより総合的なアプローチを取り、日本文学全体の特徴や概要を把握することである。また、「日本文学史」はより詳細な歴史的背景や作品の紹介に焦点を当てる傾向があり、一方で「日本文学概論」はより広範な視野で文学の基礎的な概念や理論を学ぶことである。

一部の大学ではこの科目が「日本文学概論」と呼ばれていても、依然として「文学史」の内容で授業されている。しかし、近年、各大学は単位を削減し、学生により多くの自主学習時間を与え、学生が自分の得意分野や興味を持つ科目を選択し、複合型の人材を育成しようとする試みをしている。『指南』では、日本語専攻の修学単位を150～180単位と設定しており、中には共通基礎科目、専門基礎科目、専門選択科目が含まれている。共通基礎科目は通常50～60単位程度であり、実践科目には卒業論文も含まれ、約10～15単位ある。専門科目には約90～100単位が割り当てられているが、その中には文学のほかに、言語、文化、ビジネス、翻訳などのコースの単位も含まれる。そのため、文学に割り当てられる単位は非常に少なくなっている。このような状況の中で、日本文学史を2学期に分けて古典文学史と近現代文学史を教えることはもはや不可能である。「日本文学概論」はより広範で、理解しやすい内容を求められており、日本語専攻の学生にとって日本文学に対するマクロな理解を促すものである。これにより、「日本文学史」と「日本文学概論」の授業性質、教育目標を再定義し、両科目の教育方法や教材選定の改革を推進する必要があると考えられている。

以下は日本文学教育の代表的な科目「日本文学史」と「日本文学作品選読」を取り上げ、具体的に中国の大学における日本文学教育の様子と問題を分析する。

2. 「日本文学史」授業の実態と問題

1918年、中国の新文学の発展の参照とするために、周作人が「日本近三十年小説之発達」とした長文を執筆し、これは中国で最初の体系的な日本文学史の記述と見られる。10年後の1929年に出版された謝六逸の『日本文学史』は、中国初の完全な日本文学の総史である。その後、半世紀以上、中国の日本文学史の執筆はほぼ空白の状態にあった。1970年代から、中国の学者は日本の『日本文学史』を翻訳し始めた。付表2が示すように、吉田精一（1976年）、西郷信岡（1978年）らの文学史著作はこの時期に翻訳紹介されたものである。中国学者が編著した文学史著作の参考文献を見れば、1970年代と1980年代に翻訳されたこれらの日本の文学史の著作は、1980年代に始まった中国の日本文学史編纂作業の主要な参考文献となり、中国における日本文学史研究、編纂作業の基礎を築いたと

言っても過言ではない。

1982年に王長新が編著した日本文学史が出版されてから、現在まで、中国での日本文学史の編纂の歴史は40年となった。この40年は、3つの時期に分けることができる。最初の時期は、1982年から2000年までで、出発期と呼ばれる。2番目の時期は、2001年から2010年までの繁栄期である。そして、3番目の時期は2011年から現在までの多様化の時期に属している。付表1が示しているように、不完全な統計によると、1982年から今まで、各種日本文学史教材は約57種ある。日本文学史の教材の編纂に従事するのはほぼすべて大学の日本語教師や日文学研究者である。

最初の時期に出版された日本文学史の著作は、主に東北地域に集中している。東北地域は比較的早く大学の日本語専攻を設置したためであろう。また、この時期に出版された17冊の文学史のうち、ほとんどが中国語で書かれており、日本語で書かれているのは王長新、譚晶華、金煥燦3人の著作しかなかった。この時期には、すでに現在でもよく再版され、広く使用されている影響力のある教材が登場した。例えば、譚晶華の『日本近代文学史』は、継続的な修正と補足を経て、3回再版され、現在でも多くの大学に使用されている。「その中で最も代表的であり、最も学術的な価値と影響力があるのは、葉涓渠の著作『日本文学思潮史』、『20世紀日本文学史』、そして葉涓渠と唐月梅夫妻共著による『日本文学史』（全6巻）である」²⁾。全書の構造は緊密で、知識が豊富で、情報が充実している。専門書としても、参考書としても活用できる。中国語で書かれているので、中国の日本文学史の学習者や研究者にとって、欠かせない参考書とされている。

第二期の文学史教材はさらに細分化され、種類も豊富になった。特定の時代の文学の特徴に焦点を当てた古典、近代、戦後の文学史の教材が出版された。形式的にも、歴史的進行に沿って古代から現代までの形式にこだわらなく、ジャンル別（張予娜著）、特定テーマ別（葉琳著）に編著したものもある。

第三期には、文学史の教材が多様性を呈し、伝統的な古典文学史や近現代文学史に加えて、日本女性文学史（劉春英著）や推理文学史（錢曉波著）など、特定の領域に焦点を当てた文学史も現れた。しかし、この種の著作は専門性が高く、日本文学の愛好者や大学生、大学院生の参考書として適しているが、大学生向けの文学史教材としてはあまり使用されていない。思考問題、練習問題、練習問題解説（呉魯鄂著）、大学院受験模擬テスト（張如意著）などの資料がついているのはこの時期の教材のもう1つの特徴である。また、一部の教材は教師用講義ノート、オンライン講義（MOOC）、リソースもある（高潔著）。ほかに、中日文学交流の視点から編集した教材もある（劉曉芳著）。

57冊の日本文学史関連の著作の中で、よく文学史、文学概論の教材として使用されているのは呉魯鄂『日本文学教程』、李先瑞『新編日本文学史』、高鵬飛『日本文学史』、張

如意『日本文学史』、崔香蘭『新編日本文学史』、肖霞『日本文学史』、譚晶華『日本近代文学史』、劉利国、何志勇『挿図日本文学史』、劉曉芳『日本近代文学史』などが挙げられる。これらの教材は内容からいうと3種類に分けられる。1つ目は日本文学全史で、古代から現代までの内容をカバーしている。2つ目は日本古典文学史で、上代から近世までを対象としている。3つ目は近現代文学史で、明治から平成までを対象としている。もちろん、出版されている教材の中から何冊か選んで参考書とし、担当教師が自分で編集する教材を使っている大学もあれば、日本で出版されている文学史を使用している大学もある。その代表は秋山虔、三好行雄が編著した『新日本文学史』である。この教材は、上代の文学から近現代の文学までを網羅的系統的にまとめた1冊である。そして、作家の名前や作品名、難しい日本語には、読み方も付けられており、学生の学習をサポートしている。各章の最初のページにその時代の歴史背景と文学概観が紹介され、学生が各章の全体像を把握しやすいのである。また、各章の後にはポイントチェックが付いており、学生が要点を復習するのにいいと思う。一番好評を博するのは、カラー印刷で、本文・写真とも充実し、生き生きとした作者、作品の姿が浮かび上がる場所がある。上段、下段に分け、上段の本文は小見出しを多用し、読みやすく文学史の流れを解説し、下段の補説では、ジャンル別作品の流れ、一覧表式まとめ、関係年表、本文を掘り下げた「参考」「語注」など、詳しく解説している。

中国でも多くの文学史教材が出版されているが、秋山虔、三好行雄の教材と比較すると、明らかに以下の不足が存在することがわかった。まず、教材のデザインが活発さに欠けている。ほとんどの教材は密集したレイアウトで、白黒印刷で、写真が少ない。次に、日本語で書かれているものの、作家や作品名、難しい言葉に読み方を付けていないため、学生は単語を調べたり予習したりするのに多くの時間を費やさなければならない。文学史の授業は上級日本語の授業になり、学生は興味を失ってしまう。それに、内容は古くて学生の関心を引き付けるのが難しい、あるいはあまりにも専門的すぎて学生が難しいと感じることが多い。

以上を踏まえると、近40年間にわたり中国で出版された日本文学史の教材は数多くあるが、日本文学教育の発展に比べて、比較的遅れ、形式や内容には改善の余地があると言えるだろう。全体として、文学史の授業においては、文学通史を教えることができる教師の数が少ないこと、教授法が比較的単一であること、授業効果が不十分である問題がある。

日本文学史の授業では、時間的な流れを追う歴史的な授業内容なので、教師は時代ごとの文学の特徴や背景を詳細に説明し、学生にそれぞれの時代の作品や作家を理解する手助けをし、教師主導の講義やディスカッション、プレゼンテーションなどを活用することが

重要である。また、適切な教材を選定し、歴史的な文学作品や文学史の専門書、研究論文などを使用して授業を補完し、学生が各時代の文学作品に触れ、その背景や著者の理解を深めるための読書課題やレポート課題も効果的かもしれない。

一方、「日本文学概論」の授業では、日本文学全体の概要を学ぶため、教師は広範囲での議論や比較を促進することが重要である。教材としては、日本文学の概要や基本的な概念を解説した教科書や参考書、さらには代表的な文学作品のアンソロジーや選集などを活用するのも1つの方法である。授業では、教師が学生との対話を通じて文学の特徴や重要な概念を説明し、学生に自主的な研究や解釈を促し、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションなどの活動を通じて、学生の主体的な学習を促進することができると思う。

3. 「日本文学作品選読」授業の実態と問題

日本文学作品選読の授業は、日本文学史と同じ、日本語言文学専攻の主要なカリキュラムの1つであるが、日本文学史と違って、必修科目ではなく、選択科目である。2000年『大学日本語専攻高学年段階教育大綱』において、日本文学作品選読のシラバスについても詳細に説明されている。具体的に、「学生が異なる時代や流派の代表的な作品を選読し、分析し、鑑賞することで、作品の創作手法、技法、言語特性、思想内容、及び作品が生まれた時代や社会背景を理解することが期待されている」。前述のとおり、日本文学作品選読の授業も普通、3、4年に1学期か2学期に開設されている。1学期で古典文学作品と近現代文学作品を取り扱う大学もあれば、2学期を設けて、前期は古典文学作品、後期は近現代文学作品を開講する大学もある。また、近現代文学作品しか開講しない大学も少なくはない。

日本文学作品選読の教材は、おそらく日本文学史と同様に1980年代に始まったものと考えられる。付表3からは、1980年代から現在まで、さまざまな文学作品選読教材が出版され、合計83冊ぐらいある。またこれはおおよそ日本文学史教材の2倍に相当する。これにより、日本文学作品選読教材の編纂は、日本文学史の教材よりも自由度が高く、比較的容易であることがわかった。各時期の教材の特徴について、殷明艶はすでに卒業論文「中国の大学日本語学科における日本文学教材への考察——『日本文学作品選読』を中心に」（2017）において詳しく分析したので、ここでは言及しない。

編纂方法といえば、主に作品主体で編む方法を取っている。内容上は「原文」「作者紹介」「注釈」「作品鑑賞」「先行研究」「思考問題」「訳文」などが挙げられる。授業の時、また作品のあらすじ、主題、創作背景、登場人物の特徴、及び創作スタイルなどに基づい

て、簡潔な分析と鑑賞を行う。しかし、ゼロから始まった日本語専攻の学生に対しては、原文を理解すること自体が容易ではないが、さらなる鑑賞や研究を行うことはさらに難しくなる。そのため、一部の学生は授業前に翻訳されたテキストを先に読み、授業中にまた学習を進める傾向があるので、一部の教材は、教材の後ろに中国語訳を添付している。これにより、学生が学習しやすくなる。

日本文学作品選読の教材は大体3種類ある。即ち、古典、近現代、そして、古典から近現代までである。ただし、半分以上が近現代作品選読教材である。2010年以後作品選読の教材も多様化し、ジャンル別（安勇花著）、特定テーマ別に編著したものが現れた。『日本影視文学欣賞』（徐瓊・陳娟、2011年）、『日本児童文学作品選読』（張紅兵・劉向紅・2011年；閻萍、2012年）、『日本海洋文学作品選読教材』（劉軍、2018年）、『日本女性文学名作賞析』（劉家鑫、2009年；由同来、2019年）、『中国題材日本近現代文学作品賞析』（張瑾、2019年）、『日本生態文学作品導読』（楊曉輝、2022年）などが挙げられる。

83冊の作品選読の教材の中で、代表的で、よく採用されているのは于榮勝の『日本現代文学選読』、王志松の『日本近現代文学選読』、譚晶華の『日本近代文学名作賞析』、王吉祥の『日本文学作品選読』、孫立春の『日本近現代文学作品鑑賞』などである。選ばれた作品は小説、随筆、散文、説話、劇文学などいろいろなジャンルが含まれているが、小説類作品の比重が重く、日本文学作品選読教材の中心的位置を占めている。そして近現代の短篇に集中している。入選率の高い作品は主に川端康成の『伊豆の踊子』、志賀直哉の『城の崎にて』、夏目漱石の『心』（一部抜粋）、芥川龍之介の『羅生門』や『竹の子』、森鷗外の『舞姫』、太宰治の『走れメロス』などの伝統的な名作がある。

作品選読の授業は教師の自由度が高く、普通選定教材にこだわらないので、教材の問題がこの授業の主要な問題となるべきではない。まず名作を選んで、それから、それぞれの学年の学生の特性や興味に応じて、何冊かの教材を併用し、作品を決めて授業に活用するのは普通のやり方である。

といっても、日本文学作品選読教材はやはり日本文学史教材と同じような問題が存在する。要するに、日本文学作品選読教材は改革解放から現在までの40年間、長足の進歩を遂げたが、時代とともに、学習者のニーズも変化しており、文学作品選読教材も日々進化させなければならない。

おわりに

中国の大学における日本文学教育は、日本語専攻が開設されて以来、日本語教育の重要な一環であり、その歴史は経済や観光などほかの分野の日本語教育よりも長い。しかし、

直近の20年間、社会経済の発展や国際情勢の変化に伴い、日本文学の授業開設はさまざまな波乱を経験してきた。一時期、3、4年において4学期連続で日本文学の授業が開講されるなどの栄光の時期もあったが、授業が開講されないなどの冷遇も経験してきた。中国の大学における日本文学教育は、一定の伝統を持ちながらも、近年の変化によりさまざまな課題に直面していると言える。具体的には、教員の不足、教育手法の単一性、学生の興味不足、教材の問題などが挙げられる。

『古事記』から村上春樹まで1300年の日本文学史、作品選読の授業を担当できる教員が不足しているのは深刻な問題である。また、時間の制約で、わずか16回の授業で1300年を見通そうとすると、作品と作者の名前を暗記するだけの授業となり、学生は興味を失ってしまう。個々の作品を詳しく取り上げようとするれば、もはや「文学史」ではなく文学作品講読になってしまう。このジレンマをどう解決して授業を行うかは切羽詰まった事情である。多くの教師が一方的に授業を行っており、学生は依然として受動的な立場にあり、結果として、授業が退屈で理解しにくいと感じ、効率的に授業の目標を達することができないのである。

そして、一部の学生は、日本語の聞き取りや話す能力、試験のスコアにのみ注目し、日本文学の授業の重要性を理解していない。また、入学前の試験対策教育の影響で、適切な読書習慣や文学鑑賞能力を身につけていないゆえ、学生は日本文学作品を読む際に言語・文化的な困難があり、深い理解に至ることが難しく、授業後も作家や作品に対する理解も不十分である。

それから、中国では日本文学史、作品選読の教材が多く出版されており、その数と種類は豊富とは言えるが、一部の教材は比較的伝統的な形式であり、レイアウトがきつく、十分な図表や挿絵に欠けている。また、一部の教材は読みやすさや難解な言葉の注記に改善の余地があり、これが学生の学習に一定の困難をもたらしている。さらに、一部の教材は学術的すぎて学生の興味を引くことができず、古く概括的すぎて新規性や深さに欠けている。

これらの課題を克服するためには、教員の育成や教材の改善、多様な教育手法の導入が必要である。学生の関心を引きつけるために、より魅力的な授業内容やアプローチが求められる。教育方法としては、両方の授業でアクティブラーニングやプロジェクトベースの学習方法を導入することが有効かもしれない。また、現代の技術を活用したオンラインリソースやデジタル教材も授業の補完に役立つに違いない。最新の研究成果や文学解釈のトレンドを取り入れ、学生の学習意欲や興味を引き出す工夫もしなければならぬ。日本文学史教材の編集においては、21世紀に向けた中国の特色と時代の特色を反映できる新しい日本文学史を編集すべきである。編集者は、「世界文学の視点、中国の視点、比較文学

の視点の『三次元の視点』を踏まえ、確かな研究を行い、つまり、世界文学の視点で日本文学史を研究し、中国の学者の視点で分析し、比較文学の方法で日本文学史を編集すべきであろう」³⁾。

さらに、日本文学教育の歴史的変遷を踏まえ、今後の教育改革に向けた方針を検討することが重要である。これらの改善策を実施することにより、中国の大学における日本文学教育の質と効果を向上させ、学生の学習意欲と理解力を高めることが期待されている。

注

- 1) 『普通高等学校本科外国語文学類専業教学指南』。
- 2) 王向遠 (2012) 「日本文学史研究中基本概念的界定与使用—葉涓渠、唐月梅著『日本文学思潮史』及『日本文学史』」『山東社会科学』第212期, 90-98頁。
- 3) 陳平原 (2012) 『作為学科的文学史』北京: 北京大学出版社, 5頁。

参考文献

- 孫立春・連永平 (2015) 「高校日本文学課教学現状調査和対策研究」『文学教育』126-128頁
- 劉曉芳 (2012) 「關於日本語専業日本文学課程教学的一些思考」『日語教育与日本学』第2号, 26-35頁

付表1 中国における日本文学史教材一覧

番号	教材名	編著者	出版社	出版年
1	日本文学史（中国語） 日本文学（中国語） 日本文学史（中国語） 極簡日本文学史	謝六逸	北新書局 商務印書館 上海書店 上海三聯書店	1929年9月 1929年10月 1991年12月 2014年6月
2	日本文学史（日本語） 日本文学史（中国語）	王長新	外語教学研究出版社 吉林大学出版社	1982年9月 1990年11月
3	日本文学史（中国語）	呂元明	吉林人民出版社	1987年12月
4	戦後日本文学（中国語） 戦後日本文学史論（中国語） 戦後日本文学史（中国語）	李徳純	遼寧人民出版社 訳林出版社 人民文学出版社	1988年2月 2010年8月 2018年4月
5	日本現代文学思潮史（中国語）	葉涓渠, 唐月梅	中国華僑出版社	1991年6月
6	日本現代文学史（中国語）	陳徳文	南京大学出版社	1991年8月
7	日本近代文学史 2版 3版 4版	譚晶華	上海外語教育出版社	1992年4月 2003年1月 2010年11月 2021年8月
8	日本中世文学史（中国語）	宿久高	吉林大学出版社	1992年6月
9	日本文学簡史（中国語） 再版	雷石楡	河北教育出版社 南開大学出版社	1992年8月 2019年8月
10	日本文学概説	李均洋	陝西人民教育出版社	1992年11月
11	日本近代文学史	金煥璣	東北朝鮮民族教育出版社	1993年5月
12	当代日本文学史綱（中国語）	瀋国経	遼寧教育出版社	1993年9月
13	東方文学簡史：日本の部分（中国語）	魏大海	海南出版社	1993年12月
14	日本文学史話（中国語）	劉振瀛	商務印書館	1995年5月
15	日本文学思潮史（中国語）	葉涓渠, 唐月梅	經濟日報出版社	1997年9月
16	20世紀日本文学史（中国語） 2版 3版 4版	葉涓渠, 唐月梅	青島出版社	1998年10月 2004年1月 2010年1月 2014年1月
17	日本文学史（近代卷・現代卷, 全6巻, 中国語）	葉涓渠, 唐月梅	經濟日報出版社	2000年1月
18	日本文学史（中国語）	馬興国	春風文芸出版社	2000年3月
19	新日本文学史	周曉傑	吉林人民出版社	2003年3月
20	日本文学史（古代卷・近古卷, 全6巻, 中国語）	葉涓渠, 唐月梅	崑崙出版社	2004年1月
21	日本古代文学史	高曉華	大連出版社	2004年6月
22	日本文学史 2版	張如意	河北大学出版社 外語教学与研究出版社	2004年8月 2014年1月
23	20世紀日本文学史——以小説 為中心（中国語）	謝志宇	浙江大学出版社	2005年8月
24	日本文学簡史（中国語）	葉涓渠, 唐月梅	上海外語教育出版社	2006年4月
25	日本文学史	李永夏	吉林華僑外国語学院	2006年10月

番号	教材名	編著者	出版社	出版年
26	日本文学史 2 版	李光澤	大連理工大学出版社	2007 年 7 月 2012 年 2 月
27	日本文学教程 2 版 3 版	吳魯鄂	武汉大学出版社	2007 年 8 月 2012 年 7 月 2023 年 8 月
28	簡明日本近現代文学史教程 2 版	徐明真	北京言語大学出版社	2007 年 5 月 2023 年 6 月
29	日本古典文学史	高文漢	上海外国語教育出版社	2007 年 12 月
30	日本近現代文学史	任力	東北林業大学出版社	2008 年 1 月
31	日本文学史	肖霞	山東大学出版社	2008 年 3 月
32	日本文学簡史 2 版	李先瑞	南開大学出版社	2008 年 4 月 2022 年 1 月
33	挿絵日本文学史（中国語）	劉利国, 何志勇	北京大学出版社	2008 年 9 月
34	現代日本文学批評史	葉琳, 呂斌, 汪麗影	上海外語教育出版社	2008 年 9 月
35	新編日本文学史 2 版	崔香蘭, 張蕾	大連理工大学出版社	2009 年 7 月 2015 年 3 月
36	日本文学教程	張予娜	華東理工大学出版社	2010 年 3 月
37	日本近現代文学史（中国語）	王健宜, 吳艷, 劉偉	世界知識出版社	2010 年 3 月
38	日本戦後文学史（中国語）	曹志明	人民出版社	2010 年 8 月
39	簡明日本文学史双語教材	錢韜	四川大学出版社	2011 年 4 月
40	日本文学史 2 版	高鵬飛, 平山崇	蘇州大学出版社	2011 年 5 月 2022 年 7 月
41	日本文学簡史（中国語）	于榮勝, 李強, 翁家慧	北京大学出版社	2011 年 5 月
42	日本文学史	鄒潔, 孫蘇平	哈爾濱工業大学	2012 年 1 月
43	日本女性文学史（中国語）	劉春英	商務印書館	2012 年 12 月
44	概説日本文学史	劉利国, 羅麗傑	大連理工大学出版社	2013 年 1 月
45	日本古典文学史	閔立丹	北京言語大学出版社	2013 年 6 月
46	日本近代文学史	劉曉芳, 木村陽子	華東理工大学出版社	2013 年 11 月
47	日本当代文学史（中国語）	楊国華	上海三聯書店	2014 年 1 月
48	精編日本文学史	許沢兮	南開大学出版社	2015 年 4 月
49	新編日本文学史	李先瑞	南開大学出版社	2016 年 7 月
50	日本現代文学思潮論	肖霞	山東大学出版社	2019 年 1 月
51	日本文学史	韋淵	中国紡織出版社	2020 年 9 月
52	日本文学概論（近現代篇, 中国語）	高潔, 高麗霞	上海外語教育出版社	2022 年 8 月
53	日本推理文学史	錢曉波	上海人民出版社	2022 年 11 月
54	新編日本文学簡史（中国語）	張龍妹, 曲莉, 岳遠坤	外語教育与研究出版社	2023 年 3 月
55	日本近代文学史	張晋文	華中科技大学出版社	2023 年 6 月

番号	教材名	編著者	出版社	出版年
56	日本文学史概論	劉利国, 羅麗傑	大連理工大学出版社	2023年7月
57	日本文学簡史	孫立春, 連永平, 阿莉塔	上海外語教育出版社	2023年9月

付表2 中国語に翻訳された日本文学史教材一覧

番号	訳書名	編著者	翻訳者	出版社	出版年
1	現代日本文学史	吉田精一	齊幹	上海人民出版社	1976年1月
2	日本文学史	西郷信岡	佩珊	人民文学出版社	1978年3月
3	戦後日本文学史・年表	松原新一ら	羅伝開ら	上海訳林出版社	1983年4月
4	日本近代文学史話	中村新太郎	卞立強, 俊子	北京大学出版社	1986年2月
5	日本文学史概説	市谷貞次	倪玉, 廖偉群, 劉春英	東北師範大学出版社	1987年12月
6	日本戦後文学史	長谷川泉	李丹明	三聯出版社	1989年11月
7	当代日本文学史綱	平猷明	潘国経	遼寧教育出版社	1993年9月
9	日本文学史序説 2版	加藤周一	葉渭渠, 唐月梅	開明出版社 外語教学与研究出版社	1995年9月 2011年9月
11	日本文学史	古橋信孝	徐鳳, 付秀梅	南京大学出版社	2015年12月
12	日本近代文学史	高須芳次郎	黎躍進, 杜武媛, 李建華	中央編訳出版社	2017年9月
13	日本文学簡史	清水義範	邱惠悠	四川文芸出版社	2020年4月
14	日本文学史	小西甚一	鄭清茂	訳林出版社	2020年6月
15	日本近代文学史	伊藤整	郭尔雅	商務印書館	2020年9月

付表3 中国における日本文学作品選読教材一覧

番号	教材名	編著者名	出版社	出版年
1	日本近代文学選読	北京第二外国語学院日本語学部教研室	上海訳文出版社	1986年10月
2	日本近現代文学作品選読	簡佩芝, 陳華炎	吉林人民出版社	1990年12月
3	日本近現代文学閲読与鑑賞 (上・下) 附日本近現代文学概 述	劉振, 卞鉄堅, 潘 金生	商務印書館	1993年2月
4	日本文学選読	宿久高	吉林大学出版社	1994年1月
5	日本現代文学選読 日本現代文学選読 (増補版上・ 下)	于榮勝	北京大学出版社	1997年1月 2006年5月
6	日本文学 日本文学 (改定)	劉利国	北京大学出版社	1996年11月 2010年1月
7	日本近現代文学選読	王述坤	遼寧人民出版社	1999年2月
8	日本近現代文学	孫樹林	大連理工大学出版社	2000年8月
9	日本文学作品選読	周平	上海外語教育出版社	2001年1月

番号	教材名	編著者名	出版社	出版年
10	日本古典文学	崔香蘭, 張蕾	大連理工大学出版社	2001年3月
11	日本古典文学読本	劉瑞芝, 潘金生, 小林保治, 津本信博	浙江古籍出版社	2002年7月
12	日本古典文学	王健宜, 劉偉	上海外語教育出版社	2002年7月
13	日本近代文学名作賞析 2版	譚晶華	上海外國語教育出版社 華東理工大学出版社	2003年5月 2017年11月
14	日本近代文学賞析	王之英	南開大学出版社	2003年8月
15	日本古典文学 (中国語)	劉德潤, 張文宏, 王磊	外語教育与研究出版社	2003年12月
16	日本名作高効閲読	平野芳己, 吳小瑾, 吳珺	中国宇航出版社	2004年6月
17	日本近现代文学作品選析	高寧, 韓小龍	上海外語教育出版社	2004年12月
18	日本現代短篇名作賞析	由同來	南開大学出版社	2005年6月
19	日本近现代文学作品選讀 2版	吳魯鄂	武漢大学出版社	2006年1月 2012年7月
20	日本近现代文学作品選讀	何建軍, 臧運發, 史軍	南開大学出版社	2006年2月
21	日本文学選讀	鐘玉秀, 王小岐	北京理工大学出版社	2006年5月
22	日本古典文学	劉偉, 王健宜	南開大学出版社	2006年8月
23	日本古典文学作品選讀	高文漢	上海外語教育出版社	2006年9月
24	日本古典文学入門	張龍妹	外語教学与研究出版社	2006年10月
25	日本近代文学	王之英	南開大学出版社	2006年11月
26	高級日本文学導讀	楊洪鑑	大連理工大学出版社	2007年5月
27	日本文学選讀	符夏鸞	黑龍江人民出版社	2007年7月
28	日本近现代文学作品選析	肖書文	華中師範大学出版社	2007年8月
29	日本文学選讀	傅蔭	對外經貿大学出版社	2007年11月
30	日本近代文学作品選讀	李洪学, 曹志明	黑龍江大学出版社	2007年11月
31	日本近现代战争文学選讀	何建軍	南開大学出版社	2008年3月
32	日本文学選集	趙曉柏, 應傑, 陶振孝	外語教学与研究出版社	2008年4月
33	日本古典文学作品選讀	武德慶, 吳魯鄂	武漢大学出版社	2008年6月
34	日本文学 (上)	張龍妹, 曲莉	高等教育出版社	2008年9月
35	日本当代小説導讀	劉家鑫	南開大学出版社	2009年1月
36	一生必讀的日文名篇佳作	劉德潤, 劉淙淙	中国宇航出版社	2009年1月
37	日本近现代文学作品導讀 明治以来的不朽名作	劉德慧, 孫立成	世界圖書上海出版公司	2009年1月
38	日本短篇小説作品選讀	吳魯鄂	武漢大学出版社	2009年3月
39	日本近现代文学選讀	王志松, 林濤	外語教学与研究出版社	2009年4月
40	日本文学選讀	于榮勝	北京大学出版社	2009年6月
41	日本近现代文学精讀	王述坤	南開大学出版社	2009年7月

番号	教材名	編著者名	出版社	出版年
42	日本当代女作家小説導読	劉家鑫	南開大学出版社	2009年11月
43	日本文学教程	張予娜	華東理工大学出版社	2010年2月
44	日本当代短篇名作賞析	由同来	南開大学出版社	2010年3月
45	日本現代文学	田鳴	南開大学出版社	2010年5月
46	日本近現代文学選読	宿久高	北京言語大学出版社	2010年6月
47	日本近現代文学作品鑑賞	孫立春	大連理工大学出版社	2010年10月
48	日本文学名作選	曾田和子, 揭侠	天津大学出版社	2010年10月
49	日本近現代文学作品精選	李玉麟	旅遊教育出版社	2011年1月
50	日本文学作品精選	楊紅	大連理工大学出版社	2011年3月
51	日本影視文学欣賞	徐瓊, 陳娟	外教学与研究出版社	2011年4月
52	日本児童文学作品選読	張紅兵, 劉向紅	南開大学出版社	2011年4月
53	日本古代文学作品選析	恩田満, 徐仙梅	安徽大学出版社	2011年4月
54	日本文学作品選読	王吉祥	浙江大学出版社	2011年11月
55	日本児童文学選読	閻萍	中国伝媒大学出版社	2012年5月
56	日本近現代文学名著賞析	段宏芳, 陳穎超, 張素文	黑竜江人民出版社	2012年12月
57	日本文学選読	王霜	蘭州大学出版社	2014年4月
58	日本近現代文学作品選読	阮毅	上海外語教育出版社	2014年4月
59	日本現代長編名作賞析	由同来	南開大学出版社	2014年10月
60	日本中世, 近世文学作品選析	恩田満	安徽大学出版社	2015年6月
61	日本近現代文学作品選読	張海萌	天津大学出版社	2015年8月
62	日本物語文学作品選読	周萍萍	学苑出版社	2015年12月
63	日本近現代文学作品選読	範亜秋ら	蘭州出版社	2016年1月
64	日本近現代文学翻訳と賞析	石雲艶	南開大学出版社	2016年8月
65	日本海洋文学作品選読教材	劉軍	華東理工大学	2018年6月
66	日本近現代文学作品選読	馬楽	武漢大学出版社	2018年12月
67	簡明日本古典文学読本	劉德潤, 荆艶鶴, 張建宇	中国宇航出版社	2019年1月
68	日本現代女性文学短篇名作賞析	由同来	南開大学出版社	2019年3月
69	中国題材日本近現代文学作品賞析	張瑾	新華出版社	2019年6月
70	日本近現代文学名篇選読	劉德潤, 劉淙淙	上海世界図書出版公司	2019年7月
71	日本近現代文学読訳賞析	南海	浙江工商大学出版社	2019年7月
72	日本經典文学作品選読と鑑賞	楊本明	吉林大学出版社	2019年8月
73	日本近世文学作品賞析	王欣	武漢大学出版社	2019年10月
74	日本古典文学鑑賞	華桂萍	東南大学出版社	2019年12月
75	日本近現代文学名家名著導読	曾峻梅, 高潔, 高麗霞	上海外語教育出版社	2020年7月
76	日本近代文学選読	周晨亮, 趙秀娟	北京理工大学出版社	2020年7月

番号	教材名	編著者名	出版社	出版年
77	日本現代女性文学選読	肖霞	山東大学出版社	2020年7月
78	日本文学選読	安勇花, 佐々木勝司	武漢大学出版社	2021年3月
79	日本近現代文学作品賞析	王淨華	武漢大学出版社	2021年7月
80	晨読夜誦每天読一点日本短篇名作	徐青, 黄学傑	華東理工大学出版社	2021年9月
81	日本古典文学十五講	劉德潤, 劉淙淙	外教学与研究出版社	2022年6月
82	日本生態文学作品導読	楊曉輝	北京大学出版社	2022年10月
83	日本近代文学作品選読	張蕾	上海交通大学出版社	2023年1月